

島根県立
古代出雲歴史博物館
NEWS

2012.DEC vol.25



CONTENTS

- 2・3 企画展「匠の技」特集
- 4 博物館トピック
- 5 学芸員通信
- 6 博物館だより／まいぶんセンター通信
- 7 古代文化センターだより
- 8 れきはくごよみ



古代出雲歴史博物館

企
画
展

匠の技

弥生木製品から
出雲大社まで

平成25年1月18日(金) - 3月17日(日)

●開館時間／《2月末まで》午前9時～午後5時・《3月から》午前9時～午後6時 ●休館日／毎月第3火曜日【会期中の休館日は2月19日】

企画展

匠の技 —弥生木製品から出雲大社まで—

- ◆ 会 期 平成25年1月18日(金)～3月17日(日)
- ◆ 主 催 島根県立古代出雲歴史博物館・島根県古代文化センター
- ◆ 特別協力 出雲大社

木は日本人にとって最も身近な素材です。森林資源に恵まれた日本列島では住まいや暮らし、生業など木が生活の隅々まで使われてきました。我が国の文化は、木に代表されるといっても過言ではありません。とりわけ山陰では、弥生時代の優美な花弁高坏など優れた木の文化が早くから展開していたことが知られています。また、今春平成の大遷宮を迎える出雲大社をはじめとして、我が国の伝統建物は木を素材としており、その建築技術は今日まで脈々と受け継がれています。

今回の企画展では、こうした木の文化を概観するとともに、木の伐採・製材実験や、木製品の復元製作など実験考古学の成果を盛り込んで、匠の技、すなわち木製品の製作技術に迫ります。

楽浪漆器
(東京大学考古学研究室蔵)

企画展関連講座

日本原始・古代の木製品研究

■1月19日(土) 10:00～11:30 ■講師/山田昌久氏(首都大学東京教授)

弥生時代木製品の模刻を試みて

■2月3日(日) 13:30～15:00 ■講師/三宅博士氏(松江市立玉作資料館館長)

山陰地方の木材利用

■2月24日(日) 13:30～15:00 ■講師/中原 計氏(鳥取大学准教授)

【場所】古代出雲歴史博物館講義室
【定員】100名
【参加費】無料

事前の申し込みが必要です。電話・FAX・ホームページの参加フォームにて受付。
定員となり次第、締切とさせていただきます。

ギャラリー トーク

企画展担当学芸員による展示室内での解説です。

■1月27日(日)・2月10日(日)・
2月23日(土)・3月9日(土)・
3月17日(日)
いずれも11:00～14:00～
(1日2回)

■事前申し込み不要
(特別展示室前で受付)
■常設展観覧券もしくはパスポートが必要です。

企画展関連イベント

木工ろくろによる 木製品の製作体験

木工芸の専門家に指導を受けながら手動式のろくろを使って木を削り、木製品の製作過程が体験できます。

※木製品の完成品を作る体験ではありません。

■日時: 2月17日(日)
10:00～12:00/13:00～15:00

【場所】古代出雲歴史博物館エントランスホール 【申し込み】不要(時間内随時) 【参加費】無料

檜皮作りと檜皮葺体験

公益社団法人全国社寺等屋根工事技術保存会にご協力いただき、出雲大社の大屋根でも使用した檜皮作りの見学や、檜皮を実際に葺いてみる貴重な体験ができます。檜皮葺の技術を知る良い機会ですので、皆様のご参加をお待ちしております。

■日時: 3月10日(日)
10:00～12:00/13:30～15:00



プロローグ 木と人

三瓶小豆原埋没林は、今から約4000年前の三瓶山の噴火により埋没した森です。

スギの巨木よりなるその姿は、縄文時代の豊かな山林を彷彿とさせます。獲物を求めて森に分け入った縄文人が見た光景がよみがえります。

大田市三瓶小豆原埋没林



イラスト：早川和子

I 木の道具に見る工夫

古代の人々は、樹種によって異なる木の性質を熟知していました。様々な道具を木の特性に応じて作り分けた、彼らの工夫を紹介します。

益田市沖手遺跡出土の丸木舟



II 木の道具ができるまで

木で道具を作るためには、道具に適した木を伐採し、適当な大きさに製材する必要があります。また、木の加工技術は、作る道具に応じて^{くりもの}剥物・^{ひきもの}挽物・組物など多様な展開を遂げました。

木の伐採・加工実験や復元木製品の製作実験を通して、木製品がどのように作られたのかを紹介します。

出雲市海上遺跡出土舟形容器などの復元品



III マツリと漆に見る木の文化

木は、日常生活だけでなく、豊作や子孫繁栄を祈る様々なマツリでも使われました。

また、漆はマツリに使われた木製品をみごとに彩るものでした。マツリと漆を通して、我が国の木の文化の基層を考えます。



松江市前田遺跡出土の琴復元品

IV 出雲大社の遷宮に見る木の文化

出雲大社の社殿は、古来、何度も建て直され、装いを一新してきました。出雲大社の遷宮を通して、先人が育み培ってきた匠の技を紹介します。

エピローグ 今に生きる木の文化

身近な存在であったはずの木製品は、現代生活では次第に少なくなりつつあります。

そうした中、伝統工芸技術を学び、新たな木の文化を創造しつつある若者たちを紹介します。



出雲大社本殿の檜皮葺工事

新規購入資料

常陸国風土記 (版本)

古代出雲歴史博物館 主任学芸員 久保田 一郎



天保年間に出版された『常陸国風土記』

縁結びの行事「ウタガキ」を記す部分

『常陸国風土記』は、713年に風土記編纂の命令が下ったのに応じて各地で編纂され、提出された地誌（「風土記」）のうち、よく残ったものの一つです。今回購入したのは、天保十（1839）年に印刷、出版された版本です。

『常陸国風土記』には、当時の「常陸国」（＝今の茨城県の大部分）^{ひたちのくに}のようすを詳しく記しています。ほとんど欠けていない『出雲国風土記』とちがって「以下省略」とされている部分もありますが、ところどころに『出雲国風土記』よりも詳しい記事があって、『出雲国風土記』ではよくわからない古代の様子がいっそうよくわかることがあります。

【神社】 出雲大社の地元である出雲国と似て、常陸国、とくに鹿島郡も鹿島神宮という大きな神社の地元です。『出雲国風土記』の出雲大社関係の記事が比較的簡単で短いのと対照的に、『常陸国風土記』は鹿島神宮の縁起を詳しく載せています。天智天皇の時代に鹿島神宮が造られたことや、神社に奉仕する「神戸」の人たちがいつごろ何戸から何戸に増えた（あるいは減った）、ということが具体的に記されています。大きな神社が整えられていくようすがよくわかる史料で、それは出雲大社が整えられていく歴史を考えるうえでも参考になるでしょう。

【神話・伝説】 『出雲国風土記』では、朝廷で作られた『古事記』や『日本書紀』と共通する多くの神様が登場しますが、『常陸風土記』では「フツヌシ」（風土記では「フツの大神」）だけです。ほとんどが『古事記』や『日本書紀』には名前が現れない地元密着の神様や、特定の名前が無い神様です。また、恵みをもたらす穏やかな神様ばかりではなく、水田を作ろうとする農民をささげる「ヤツの神」のような手ごわい神様も現れます。

『常陸風土記』では、神様と並んで、伝説的な天皇や人物たちが活躍する物語がたくさん収められています。とりわけ、東国遠征を行ったと『日本書紀』に記される景行天皇や日本武尊（ヤマトタケルノミコト）は、常陸国内の各地で、滞在したり、狩りや漁を楽しんだり、井戸を掘るなど、様々な物語が残っています。また、皇子のまま亡くなった日本武尊が、「倭武天皇」と記され天皇（大王）として扱われるなど、『古事記』や『日本書紀』と異なる伝えもあり、中央と地方の神話・伝説のなりたちや、両者の関係を考える手がかりにもなります。

【風俗】 出雲と常陸の風土記で共通しているのは、当時人々がたくさん集まっていたレジャースポットの描写が詳しいことです。中海（風土記では「入海」）の沿岸には、人が集まって「燕」^{うたげ}して楽しむと記された場所が複数か所あって、『出雲国風土記』の淡々とした文章がその場所では長く、詳しくなっています。ここでいう「燕」とは、男女が一緒に飲食するなかで気に入った相手に求愛する行事、今日の合コンに近いもので、当館展示室でもこの行事の場面を詳しく再現しています。『常陸国風土記』では、この行事は「ウタガキ」「カガイ」という名で現れ、『出雲国風土記』よりもさらに詳しく、筆者が持てる文章力を全開して書いたような美文で描写されています。男女の間に交わされていた求愛の歌も載せられています。当館展示室の「愛の物語」も、『常陸国風土記』とあわせて鑑賞すると、いっそう味わいが増すことでしょう。

こよみ —当館所蔵資料のご紹介—

古代出雲歴史博物館 主任学芸員 久保田 一郎



①「嘉永八年」のこよみ

書店やコンビニに、来年（平成25年）のカレンダーが賑やかに並べられる季節になりました。今号では、当館が所蔵する、少し昔のカレンダーの一部をご紹介します。

①は江戸時代に発行された「大小暦」です。陰暦では一ヶ月は「小の月=29日」「大の月=30日」の二種類があり、ある月が「大」か「小」かは年によってちがいました。ズレを調節するため「閏月」が設けられる年もありました。そこで月を間違えることのないよう作られたのが、月の大小を表した「大小暦」でした。ちなみに、上に書いてある「嘉永八年」という年は公式には存在せず、「安政2年乙卯」（1855年）にあたります。

明治5（1872）年、陽暦が採用されますが、日常生活の中に根付いていた陰暦は根強く残っており、②明治27年のこよみでも右に「新暦」、左に「旧暦」が併せて掲載されています。③大正5年のこよみでも、依然として陽暦と陰暦が同じ大きさで載せられています。陰暦は「支那共和国辰年陰暦」という名前で載っています。

陽暦と陰暦は近代以降のくらしの中でうまく使い分けられてきました。神社のお祭りも、陽暦に変更して行われる場合と、今も陰暦で通されている場合の両方があります。



②明治27(1894)年のこよみ



③大正5(1916)年のこよみ

資料
紹介

な ら は ま 波来浜遺跡出土品 (江津市教育委員会所有)

当館では、県内各市町村から多くの資料をお預かりして保管しておりますが、そのうち江津市教育委員会からお借りしている「波来浜遺跡」の発掘品をご紹介します。

「波来浜遺跡」は、江津東小学校の東に広がる大規模な砂丘の中で発見された、弥生時代中ごろの「ほうけいはりいしぼ方形貼石墓」を中心とした墳墓群です。「方形貼石墓」は土を盛り上げたり地山を加工して造られる「墳丘墓」の一種で、上から見た形が四角形で、周囲に石を貼り巡らしていることから「方形貼石墓」と呼ばれます。葬式で死者にお供えされたとみられる弥生時代中ごろの土器や、矢の先端につける鎌が遺されていました。この時期は鉄器がまだあまり広まっていない頃で、鉄製の鎌と青銅製の鎌とが発見されました。



平安時代の墓から出土した石帯

それから1000年ほどたった平安時代の中ごろ、この砂丘に再び墓が営まれました。二つ並んで見つかった墓穴の一つには、お供えに使われた土器と、「石帯」5個が遺されていました。「石帯」は衣服のベルトにつけられた飾りです。裏にあけられた小孔には、「石帯」をベルトにつなぎとめる銅製の針金がわずかに残っていたそうです。

奈良時代には金属で作られていましたが、平安時代に入ると石製にかわりました。写真にあるような、楕円形の石板の一方をスパッと一直線に切った形の「石帯」は、中世には姿を消します。



波来浜遺跡で見つかった青銅の鎌



発見されたころの波来浜遺跡遠景。
波来浜遺跡は奥に見える砂丘上に広がります

[まいぶんセンター通信]

島根県埋蔵文化財調査センター

あんでら 大田市仁摩町庵寺古墳群の発掘調査

～石見地方最大級の前・中期古墳群と弥生時代の高地性集落を発見～

埋蔵文化財調査センターでは、一般国道9号仁摩温泉津道路改築工事に先立って、平成20年度から大田市仁摩町に所在する庵寺古墳群の発掘調査を実施しています。これまでに、潮川流域を見下ろす丘陵上から、多数の古墳と弥生時代のムラの跡が見つかりました。今年度の新たな成果は以下のとおりです。

- ① 古墳時代前期末～中期（5世紀）とみられる古墳が新たに4基見つかり、合計22基もの古墳が集中する石見随一の古墳群であることが判明。
- ② 石見地方で初めて「くりぬき剝拔式木棺」（木の幹を半分に割って割り抜いた棺）の痕跡が見つかった。
- ③ 弥生時代後期初め（1世紀頃）に造成された平坦地が10か所確認された。そのうち7か所は建物が建てられていたと考えられる。

庵寺古墳群では、平成20年度には中国の前漢時代の鏡である「はっしんきょう八禽鏡」が出土しました。こうした副葬品や古墳の立地、規模から、眼下に見下ろす潮川流域を治めていた、歴代の首長かその一族が葬られていたと考えられます。

また、古墳周辺で確認された弥生時代のムラの跡は、麓からの比高が約70mもある丘陵の上に営まれた「高地性集落」です。前後する時代の集落は平地で確認されているので、あえて丘陵上にムラを営んだ当時の社会状況を検討する上で重要な調査となりました。

今後も大田市内では、一般国道9号改築工事に伴う発掘調査が実施される予定です。石東地域の古代の様相を解明することにつながるような発見にご期待ください。



「離島隠岐に残る文化財の特質に関する研究」 の調査状況

古代文化センター 主任研究員 神柱 靖彦

古代文化センターでは、今年度から古代出雲歴史博物館・埋蔵文化財調査センターと共同でテーマ研究「離島隠岐に残る文化財の特質に関する研究」を実施しています。この研究の成果は、平成25年12月より古代出雲歴史博物館で開催する特別展「隠岐の国—島々の歴史と文化—」で、ご紹介する予定です。

展示内容については現在検討中ですが、隠岐4島に残る歴史文化を考古学、文献史学、民俗学など各分野から光を当て、学際的な視点で展示を構成するべく調査を進めています。また、島根県古代文化センターでは、今後も隠岐の歴史文化に関する研究を継続的に実施していく予定です。



隠岐の島町内出土の須恵器



調査状況(西ノ島町ふるさと館)

今回の研究事業は、一連の研究事業の先鞭を切る形です。担当スタッフ（総勢9名）は張り切って各々の担当分野で調査研究に取り組んでいます。

ここでは、考古資料の調査状況をご紹介します。これまでに研究員のべ4名が手分けをして隠岐4島の9箇所にて収集されている土器や玉類、鉄製品など約460点の調査を実施しました。現地で遺物のサイズを計測し、記録を取り、写真を撮影し、それらの記録を調書としてまとめるのです。この調書を参考に特別展の展示候補となる出土遺物を決定し、展示計画を練って行きます。今後は、島外の博物館や大学などに収集されている隠岐からの出土遺物の調査を進めていく予定です。

隠岐4島の考古資料が一堂に会し展示されるのは16年ぶりで、出土遺物や古文書・民俗資料も含めた総合展示としては実に34年ぶりとなります。今回の展示が、県民の皆様にとって隠岐の歴史文化を身近に感じて頂く機会となりますよう、わかりやすく楽しい展示にしたいと考えております。観覧されたお客様から「隠岐に行ってみたくなった」「隠岐の歴史文化をもっと知りたくなった」と言ってもらえるような展示を目指して、引き続き準備を進めていきたいと考えています。



資料調査状況(海士町)



石の唐櫃古墳(知夫村)横穴式石室

企画展

スケジュール

2013

企画展

「匠の技」

—弥生木製品から出雲大社まで—

2013年1月18日(金)～3月17日(日)

企画展開催中の休館日：2月19日(火)

※詳しくは2ページをご覧ください。



特別展

平成の大遷宮「出雲大社展」

2013年4月12日(金)～6月16日(日)

特別展開催中の休館日：4月16日(火)・5月21日(火)

「平成の大遷宮」にあわせ開催するこの特別展では、出雲大社の御神宝をはじめ、考古資料や古文書など様々な文化財とともに、由緒ある諸社に伝えられてきた神道美術の精華を一堂に展覧します。



企画展

神々の国しまね「石見神楽」—舞を伝える、舞と生きる—

2013年7月12日(金)～9月8日(日)

企画展開催中の休館日：7月16日(火)・8月20日(火)

「山陰の黎明」—縄文のムラと暮らし—

2013年10月4日(金)～12月1日(日)

企画展開催中の休館日：10月15日(火)・11月26日(火)



神々の国しまね「隠岐之国」—島々の歴史と文化—

2013年12月27日(金)～2014年2月23日(日)

企画展開催中の休館日：2014年1月21日(火)・2月18日(火)

※7ページをご覧ください。



イベント案内

勾玉トリュフづくり

2013年2月3日(日) (申し込みが必要です)

昨年よりスタートしたアテンド企画のイベントです。アテンドが講師となって皆様に勾玉トリュフづくりから、ラッピングまで体験していただきます。

時間：10:00～11:30 / 14:00～15:30(1日2回)

場所：古代出雲歴史博物館 体験工房

定員：各回20名 参加費：500円

お問合せ・申し込み：古代出雲歴史博物館



歴博からのお知らせ

「宇豆柱」が帰ってきました

京都・東京国立博物館の特別展に出展していた「宇豆柱」が、半年ぶりに古代出雲歴史博物館中央ロビーの専用展示ケースに戻ってきました。

京都・東京の特別展では、「宇豆柱」をはじめとした出雲の至宝の数々を約21万人のお客様にご覧いただき、来場者の皆様には島根をより理解していただくことができたのではないかと思います。

発行／平成24年12月



島根県立古代出雲歴史博物館
Shimane Museum of Ancient Izumo

〒699-0701 島根県出雲市大社町杵築東99-4
TEL.0853-53-8600(代) FAX.0853-53-5350
URL : <http://www.izm.ed.jp> E-mail : contact@izm.ed.jp
開館時間 9:00～17:00(3月～10月は、9:00～18:00)



マスコットキャラクター
雲太くん



マスコットキャラクター
出雲ちゃん